

英語における中間態と能格構造について

On the Middle and Ergative Constructions in English

Shinya MORITA

Abstract

The purpose of this paper is to bridge a gap between linguistics and learners of English. This paper examines the way middle and ergative constructions appear in English. English middles generally appear with an adverbial modifier that affects the predicate. Without such a modifier, they will be incorrect. In addition, English middle constructions do not describe actual events. As far as middles are concerned, English undergoes tighter restrictions than French. Further, English displays aspectual restrictions in middle constructions. As far as ergatives are concerned, however, English doesn't undergo much restriction. In this paper, we will distinguish between middle and ergative constructions in English.

はじめに

能動態を機械的に受動態に書き換えても、動詞のアスペクト的性質によっては、必ずしも同じ意味にはならず、微妙なニュアンスの差異が生じる場合がある。そこで、能動態と受動態の意味の差異や These books sell well. や Potatoes cook slowly. などの自動詞の用法や、The sun melted the ice. や The ice melted. の melt や、bend, break, open, close などの自動詞にも他動詞にも両用できるもの (ambitransitives) について、その素性を lexical analysis という観点で考えてみた。今回はこうした事柄を説明するに当たり、言語学的な成果と一般学習者のギャップを埋める「橋渡しの」なものになることを意識しながら、これらをまとめておくことにする。

1 他動詞と自動詞

- (1) a. John opened the door.
b. The key opened the door.
c. The door opened.
d. The door was opened.

(1a) の主語は、動作主主語 (agentive subject) と呼ばれ、動詞の示す出来事を引き起こす有生のものを表わし、(1b) の主語は、素因の主語 (instrumental subject) と呼ばれ、出来事を引き起こす無意志の物理的な原因を表わし、(1c) の主語は、被動主語 (affected subject) と呼ばれ、出来事の影響を被る有生・無生のものとされる。

また、(1a) を受動態にすると、(1d) になるが、(1c) と (1d) は必ずしも同じ意味ではない。これについては、森田 (1990) の「ラテン語の nasal infix に関する試論」の中で、ラテン語の *accubō* と *accumbō* の相違を説明する際に、Gaffiot の羅仏辞典の定義を参照し、フランス語の代名動詞と受動態の文の組を用いて、その差異の説明を行っている¹⁾。

- (2) a. La porte s'ouvre.
b. La porte est ouverte.
c. On ouvre la porte.

(2b) は (2c) の受動態すなわち「門が開かれる」の意味になることはほとんどなく、一般には動作の結果や状態を示し、「門が開いている」の意味を示す。動詞の持つ固有の意味やアスペクトによって、微妙な差異が存在する。この現象は現代語の迂言的な受動態では広く一般的に見られるものである。

1.1 Ergative

印欧語は nominative-accusative 構造を持つが、バスク語をはじめにグルジア語やエスキモー語、またコーカサス諸語に多く見られるのが ergative 構造である。これは一言で説明することは到底不可能であるが、主格が「中心」でその他を斜格とする印欧語的な発想とは全く異なり、他動詞の直接目的語に相当する格が absolutive 「絶対格」となり、他動詞の主語に相当する格が ergative 「能格」と呼ばれるものである。さらに、「絶対格」は自動詞の主語にもなれる。英語では(1)にその現象を見ることができる。

さて、(1c) の主語は、(1a) と (1b) の文の直接目的語になっているが、affectedness (被動性) を帯びており、(1) の事象の theme になっている。この構造のことを ergative 構造といい、the door は絶対格のような役割を果たしている。これは、英語における ergative 構造に相当するものと考えられる。

1.2 Middle

ドイツの印欧語比較言語学者 Schwyzer の言葉を借りれば、受動態は中間態の一用法にすぎないという。中間態という用語はギリシャの文法家達により命名されたのだが、ギリシャ語、サンスクリット語、ヒッタイト語などに顕著に見られる。つまり、中間態の役割が過剰になり過ぎた結果、中間態から分化して受動態が生じたと考えられる。その用法は多岐にわたり、一言では到底説明不可能であるが、おおまかに言えば、「再帰・受動・自動」の3要素が特徴である。

英語においては、Jespersen がその著書 *Modern English Grammar* (Vol. 3 § 16.8) で activo-passive と呼んでいるもので、特定の種類の動詞に限定する必要はなく、こうした現象は特定の条件の下で起こる特殊な用法とされる。英語の場合、活用形の形が能動なのに実質的意味が受動的な意味を帯びるものがこれに相当し、大修館の「ジーニアス英和辞典」の改訂版では、能動受動態という用語が用いられている。

- (3) a. He dresses elegantly.
 b. He is dressed elegantly.
 c. Tom warms the rolls in the oven.
 d. The rolls are warming in the oven.

(3a) と (3b) の意味の差異はほとんどなく、英語の歴史的変化の中で再帰代名詞を省略するようになった結果の二重性である。(3a) のような動詞は converted intransitive と呼ばれている。また、(3c) と (3d) のペアに見られるような形容詞に由来する動詞には、自動詞と他動詞の区別がない。さらに、begin や end のような動詞固有の意味など、ある特定の条件下でのみ中間態構造は成立するとされる。

ロマンス諸語では、中間態構文はフランス語の代名動詞やイタリア語の *si-clitic* に顕著にその名残を見ることができる。

- (4) a. Les pommes se mangent.
 b. Le mele si mangiano.
 c. *The apples eat.

ただし、(4a) も (4b) も generic sentence である。しかし、英語では (4c) のように、非文になってしまう。

- (5) a. Bureaucrats bribe easily.
 b. The wall paints easily.
 c. This book sells well.
 d. Oranges peel easily.

英語の場合、中間態構文は、やはりフランス語やイタリア語のように generic sentence を示すのだが、必ず副詞を伴わなければならないという制限がある。

- (6) a. *Bureaucrats bribe.
 b. *The wall paints.
 c. *This book sells.
 d. *Oranges peel.

副詞を伴わない場合は、非文法的な文になってしまう。このように、この構文にはある限度があり、be sold の意味で This house sold yesterday. のような用法は許されず、一般に様態の副詞を伴わないかぎり、この構文は成立しない。また、助動詞の will を伴って、The door won't open. のような用法は認められる。つまり英語の場合、様態の副詞を伴って generic sentence を示すアオリスト的用法と will を伴った場合に成立するということから考えると、ギリシャ語の中間態の活用形は非常に示唆的である。ギリシャ語ではアオリストと未来のみが受動態とは異なる独立した活用形を持ち、それ以外の中間態の時制の活用形は全て受動態と同形なのである。

しかし、(6a) は他動詞の絶対用法として成立し、「官僚とは人を買収するものである」という意味で成立しないわけではないが、その場合は、bureaucrats は「絶対格」ではないので、ここでは非文扱いとする。

2 Ergative と Middle の相違

2.1 all by itself によるテスト²

Ergative は agentive を必ずしも必要としないが、Middle は agentive を必要とする。つまり、all by itself は totally without external aid の意で、この句と共起する場合は、ergative であり、この句と共起すると非文になる場合は middle であると判断できる。

- (7) a. The ice melted all by itself.
 b. *The wall paints nicely all by itself.

これはどういうことを意味するかというと、氷は放っておけば人間が手を加えなくても自然に解けてしまうが、壁を塗るという事態は人間の手が加えられないかぎり生じ得ないことである。

2.2 進行形テスト

一般的には、Ergative は進行形をとれるが、middle は進行形にすると非文になってしまうとされているが³、進行形は状態の変化を示すことができるので、middle の中にも進行形を許す例を認めると主張する学者もいる⁴。

(8) a. Ergative

The dinner is cooking.

His writing is improving.

The boat is sinking.

The door is closing.

b. Middle

*The wall is painting nicely.

*Bureaucrats are bribing easily.

This book is selling well.

The car is driving fast.

2.3 時制と generic sentence

Ergative は具体的な事柄に言及できるので、時制に制限はないが、Middle は一般論的な事柄にしか言及できないので、アオリスト的な現在時制でのみ用いられる。

また、Fagan によれば、English middle constructions do not describe actual events. とあり⁵、従って特定の時間を限定するような副詞類とは共起しないとされる。

(9) a. The bone fractured yesterday.

b. The boat sank yesterday.

c. Because of the wet weather, I dropped the ball and it bounced.

d. The lamp broke last week.

e. This book sold well yesterday.

更に冠詞の問題も考慮しなければならない。例えば、冠詞を伴わない単数名詞や不定冠詞を伴う名詞または bare plural とよばれる冠詞類を伴わない複数名詞などは、現在時制でのみ成立し、過去時制では成立しない。一方、冠詞類を伴った名詞は過去時制でも成立し非文にはならない。

(10) a. *Oranges peeled well.

b. Those oranges peeled well.

c. Romans bribed easily.

(10 c) は bare plural にもかかわらず、歴史的事実という要素のためか非文ではないが、通常は冠詞類を伴わない (10 a) のタイプは非文となる。

2.4 Vendler (1967) と Smith (1992) のアスペクト分類による制限

(11)

state : have, want, love, hate, know, believe

activity : run, walk, swim, push, pull

accomplishment : make a chair, paint a picture, build a house, read a book

achievement : realize, lose, find, reach

(12)

	stative	durative	telic
state	[+]	[+]	[-]
activity	[-]	[+]	[-]
accomplishment	[-]	[+]	[+]
achievement	[-]	[-]	[+]

Fagan によれば、activity か accomplishment クラスに分類される他動詞だけが、中間態構文を作ることが可能であるという⁶。state と achievement クラスに分類される動詞群は、この構文は許されず、アスペクトのタイプで制限を受ける。

(13) : activity

- a. The piano plays easily.
- b. The car drives fast.
- c. The pipe smokes nicely.

(14) : accomplishment

- a. This book reads easily.
- b. *This song sings easily.
- c. ?A chair makes easily.

しかし、全てのこのクラスの他動詞が機械的に中間態構文をなすわけではない。例えば、受動態の by-phrase agent は ordinary agent とみなされ、その性質は generic agent なので、必ずしも表示する必要はない。中間態も同様ではあるが、buy のような動詞に関しては goal agent を syntax の上で表示しなければならないという制約を受けるので、英語では中間態構文は作れないことになる。

(15) a. L'amour ne s'achète pas.

b. Ce fonctionnaire ne s'achète pas.

c. En général, ces débats s'enregistrent par Anne, qui est notre technicienne la plus qualifiée.

一方、(15 a) と (15 b) に見られるように、フランス語にはこうした制限はなく、acheter も中間態構文が可能である。さらに驚いたことに、Canadian French の一部では、(15 c) のように、シタックス上、中間態構文で par による動作主の表示が許される。

3 能格動詞について

安井稔・長谷川ミサ子著「私家版英和辞典」(開拓社)の第3章の能格動詞一覧⁷には、能格構造を取るもののリストと簡単な解説がある。この中で、注目すべきは、能格動詞の名詞形の意味に言及している点である。すなわち、能格動詞の名詞形には、その自動詞に対応する意味はあるが、他動詞に対応する意味はないということである。一般に、ある動詞が形を変え、その動詞の名詞形となる場合、その名詞形の中に受け継がれる動詞の意味は、その動詞の最も中核的な意味であるとされる。

従って (16c) は「トマトの栽培」という他動詞的な意味ではない。

- (16) a. John grows tomatoes. 「ジョンはトマトを栽培する」
 b. Tomatoes grow. 「トマトが育つ」
 c. the growth of tomatoes 「トマトの生育」

4 フランス語の中間態との比較

- (17) a. La tour Eiffel se voit de loin.
 b. On voit la tour Eiffel de loin.
 c. La tour Eiffel est vue de loin.⁸

フランス語では代名動詞が発達しており、英語に見られるような中間態構文の成立に関する制限がほとんどないが、(17a) と (17b) は「エッフェル塔はいつも遠くからみえる」という意味であるのに対し、(17c) は「エッフェル塔は(いま) 遠くからみえている」の意味を帯びることが多いといったように、中間態と受動態の間にはわずかな差異があるとされる。これは、受動態が習慣的行為の表現に適さないことを意味する。

- (18) French
 a. On chante cet air partout.
 b. Cet air se chante partout.
 c. Cet air est chanté partout.
 English
 a'. People sing this song everywhere.
 b'. *This song sings everywhere.
 c'. This song is sung everywhere.

(18b) は現状に言及した ergative か、generic sentence の middle かは、はっきりしないが、いずれにせよ文法的である。一方、(18b') は非文である。

- (19) a. La porte s'ouvre doucement.
 b. The door opens quietly.
 c. L'ufficio si apre alle ore nove.

(19a) と (19b) も ergative と middle とともに解釈され、つまり「扉が静かに開く」という意味と「扉は静かに開くものだ」という意味のどちらにも解釈できる点で似ている。また、イタリア語でも (19c) のように、(17) でふれたフランス語の中間態構文の持つニュアンスに似ており、習慣や

一般的な事柄を表わす傾向が強い。

- (20) a. Les pommes se mangent. (= 4 a)
 b. *The apples eat. (= 4 c)
 c. Ce poisson se mange grillé.
 d. La frutta si mangia cruda.

フランス語では中間態構文に英語におけるような制限はないが、どちらかといえば、generic sentence での用法が一般的であり、英語のように様態の副詞・形容詞を伴う(20 c) のような場合が多く、イタリア語でも(20 d) のように同様である。

(20 b) は非文であるが、研究社のリーダーズ英和辞典では、eat の自動詞の項目に次のような定義と例文がみられる。

- (21) a. 〈食物が〉食べられる。〈・・・〉の味がする。
 b. ~ well. で「美味しく食べられる」「食べごろである」
 c. This cake eats crisp. 「この菓子はカリカリする」

しかし、大修館のジーニアス英和辞典では、このような用法を「まれ」と定義している。これらのことから判断して、英語に比べるとフランス語はかなり自由に中間態構文を作ることが可能といえる。なお、(21) の用法は native speaker に確認したが、archaic であり、現在では用いられないというコメントを得た。

5 ラテン語とロマンス語の歴史的背景

- (22) Stellae nē moventur. 'The stars don't move.'

ラテン語でも、再帰代名詞 *sē* によるロマンス語の代名動詞のような萌芽はすでに見られていたが、もともとはラテン語の受動態の活用形の -R 形が中間態の役割を担っていた。特に俗ラテン語が、十字軍遠征時代の西ヨーロッパでは、lingua franca の状態に陥り、活用語尾の変化に意味のよりどころを置かず、代わって機能語を用いて分析的な表現方法をとるように変化してゆき、その結果、現在のようなロマンス諸語に見られるような再帰代名詞による中間態表現が確立されていったのである。

- (23) a. Domus fabricātur. (Latin)
 b. La maison se construit. (French)
 c. Si costruisce la casa. (Italian)
 d. The house is being built. (English)

ラテン語の *fabricor* は deponent verb であるが、同時に *fabricō* という能動の活用形を持つ語でもある。不思議なのは、*fabricor* は deponent verb であるにもかかわらず他動詞であり、能動形の *fabricō* の受動態の活用形とも解釈できる。(23 a) は -R 形の典型的なラテン語の受動態の活用形の特徴を示す語尾であるが、*domus* が絶対格のような振る舞いをしているようにも見える。これは明らかに中間態の名残であると思われる。

- (24) a. Domus fabricāta est.
 b. La maison est construite.
 c. La casa è costruita.
 d. The house is built. < The house has been built.

一方、ラテン語の受動態の完了系の過去時制は be 動詞と完了分詞の迂言的な表現になるが、主語の affectedness が強くなると、完了の結果の状態を示すことが多い。この現象は、英語でも同様であることは(1)の所でも述べた通りである。これに関しては、森田(1990)でも言及されている⁹⁾。(25)は「ガリア戦記」の冒頭であるが、時制の意味的シフトは(24)と同様である。

- (25) Gallia est omnis divisa in partēs trēs - - - .

6 英和辞典の定義¹⁰⁾

日本人学習者にとって理想的なのは、英語を母語とする人に確認できる環境であるが、多くの学習者にとっては、現実的ではない。そこで、辞書の利用価値を考えてみることにする。

- (26) cut (vi) 〈物が〉切られる This meat doesn't cut easily. 〈能動受動態〉
- (27) draw (vi) 〈物が〉引く、引かれる This wagon draws well [easily]. 〈能動受動態〉
- (28) drink (vi) This whiskey drinks very well. や This wine drinks sweet. のような [SVM] や [SVC] の表現は今は(米)では用いられず、(英)でも「まれ」
- (29) drive (vi) This car drives easily.
- (30) wash (vi) This cloth washes well [easily]. この生地は洗濯がきく [簡単に洗える] This material won't wash. この生地は洗濯がきかない。〈能動受動態〉
- (31) play (vi) 〈楽器・ラジオなどが〉鳴る This type recorder won't play.
- (32) read (vi) This report reads well. (=This report is written well.)
 「このレポートはよくできている」能動受動態。+様態の副詞(句)。進行形不可。
- (33) sell (vi) On a rainy day umbrellas sell well [quickly, briskly].
 「雨の日にはかさの売れ行きがよい」この意味では Umbrellas are sold well [quickly]. とは通例
 いわない。
 This magazin won't sell. 「この雑誌は売れないでしょう」否定文では副詞句をつけなくても可。
- (34) translate (vi) This novel translates easily. 「この小説はたやすく翻訳できる」
- (35) wear (vi) [SVM] (すり切れたりなどしないで) 使用に耐える、使える。〈能動受動態〉

ジーニアス英和辞典には、動詞の性質を明示する stative と dynamic の別を、可算・不可算名詞の

区別のCおよびUのように、SおよびDの頭文字で表示してある。このS表示のある動詞は、人が自分の意志で制御できない状態・出来事を示す。従って命令形にできない。また、人が主語の場合は進行形にならない。無生物主語の場合、永続的な状態を表わすときは進行形にできないが、一時的な状態を表わすときには進行形にできる。このことは、進行形が一時的な状態の変化を示すときに、進行形を認める説と一致する。(26)から(34)では、(27)(30)(31)(32)(33)(35)の項目にS表示が見られるが、基本的に英語の中間態構文はS性が強い傾向にある。non-native にとっては、こうした性質を明示してくれる辞書をうまく利用し、おおまかな middle/ergative construction の原理を知識として有しておけば十分であり、それ以上のことは実際に話したり、書いたりした際に、英語を母語とする人に相談すればよいのである。実際には、かなりの動詞については、辞書の定義の中で文法的である中間態構造のパターンに言及していない場合が多かったのも事実であった。しかし、改訂版「ジーニアス英和辞典」では、〈能動受動態〉という画期的な記述が見られた。

Native speaker によれば、(27)は This wagon rides easily. のように、rideの方がよりノーマルだという。また、(28)では「このウィスキーは飲みやすい」の意では、This whiskey goes down. が普通で、辞書の例文は archaic であるとのコメントを得た。

しかし、(36a,b) のような instrumental subject が主語になる場合は、中間態構文とは区別して考えるべきである。

- (36) a. This knife cuts well.
b. This pen writes well.

7 ま と め

最後に、もう一度 ergative と middle の差異について言及しておく。

- (37) a. The door doesn't open in wet weather.
b. The door opens with a key.

(37a) は「雨の日は(いつも)戸が閉じている」という意味(= middle)にも、「雨の時は戸が開かない」という(= ergative)意味にも解釈できるが、(37b) は「戸はカギで開けられるものだ」という(= middle)意味にしか解釈されない。さらに言及すれば、時制、法、冠詞などの要素によるアスペクトの問題がかかわってくる。

例えば、This door won't open with this key. という文は、「このカギでは(どうにも)開かない」という意味で、generic sentence ではない。'with a key' と 'with this key' とのような決定辞の指示性によっても微妙な相違が生ずる。言い換えれば、決定辞の指示性が actual event に言及することを可能にするのである。また、won't を伴う場合は中間態構文でも様態の副詞が必要とされないのは、法の問題がかかわってくるからである。

- (38) a. These shirts wash well.
b. The meat cuts easily.

(38) は典型的な middle であるが、それぞれ「このシャツは洗濯がきく」(=38a) と「この肉は楽に切れる」(=38b) という意味で、「可能」のニュアンスを帯びている。

- (39) a. 人間が台の上に乗る。

b. 皿が台の上にある。

日本語でも、同じ述語に対する主語の違いによって、多少の意味の差異が生じることがある。(39a) では単なる動作を示し、「可能」の意味はないが、(39b) は「可能」のニュアンスを帯びている。しかし、皿は agentive subject ではなく、背後にその事態を生ぜしめる動作主が存在するが、動作主を明示すると「可能」のニュアンスは無くなってしまう。この点では、(38) と (39) は非常に似ているといえる。また、辞書の定義を見ても、「切れる」「売れる」のように、「可能」のニュアンスを帯びているが、これが中間態の特徴ともいえるべきものである。

おわりに

英語の中間態構文や能格構造は決して学習者の中心に関わる問題ではないが、少ない語彙でより豊かな表現を可能にし、自動詞と他動詞の区別を意識させるという点においては、大きな意味がある。また、言語学の学問的な成果は、一般の学習者にはあまり還元されることはなかったが、その橋渡しのものがもっと多く提供されることがこれから期待されるであろう。

注

- (1) 森田信也「Aspect と Nasal Infix に関する試論」p.7
- (2) Keyser and Roeper "On the Middle and Ergative Constructions in English." p.405
- (3) Ibid. p.385
- (4) Fagan *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*. p.53
- (5) Ibid. p.52
- (6) Ibid. p.68
- (7) 安井稔・長谷川ミサ子「私家版英和辞典」 pp.206-217
- (8) フランス語ハンドブック p.146
- (9) 森田信也 「Aspect と Nasal Infix に関する試論」p.6
- (10) (26) から (35) は大修館の改訂版「ジーニアス英和辞典」から部分的に引用

参考文献

- Authier, J.-Marc and Reed, Lisa (1996) "On Canadian French Middle." *Linguistic Inquiry* 27 : 513-523
- Cruise, D.A. (1997) *Lexical semantics*. Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge University Press.
- Fagan, Sarah M.B. (1988) "The English Middle." *Linguistic Inquiry* 19 : 181-203
- Fagan, Sarah M.B. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*. Cambridge University Press.
- Keyser, S.J. and Roeper T. (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English." *Linguistic Inquiry* 15 : 381-416
- Klaiman, M.H. (1991) *Grammatical voice*. Cambridge University Press.
- Lyons, Christopher (1989) "L'aspect générique et la voix moyenne." *Travaux de linguistique* 19 : 171-186
- Meillet, A. (1964) *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*. University of Alabama Press.
- Morita, S. (1990) "An Essay on Aspect and a Nasal Infix." 早稲田大学英語学会 *Lingua* 12 : 2-14.
- Morita, S. (1992) "An Essay on Perfect and Aspect." 早稲田大学英語学会 *Lingua* 14 : 81-97

- Morita, S. (1997) "A Thought on a Nasal Infix in Latin." 山梨県立女子短期大学紀要 30 : 1 - 13
- Palmer, F.R. (1988) *The English Verb*. Longman
- Posner, Rebecca (1996) *The Romance languages*. Cambridge University Press.
- Stroik, T.S. (1995) "On Middle Formation : A Reply to Zribi - Hertz." *Linguistic Inquiry* 26 : 165-171
- Zribi - Hertz, Anne (1993) "On Stroik's analysis English Middle Constructions." *Linguistic Inquiry* 24 : 583 - 589

安井 稔・長谷川ミサ子 (1997) 私家版英和辞典 開拓社
「フランス語ハンドブック」(1988) 白水社
改訂版「ジーニアス英和辞典」(1994) 大修館

(1998年1月12日受理)

